

# デンジャー・クロース

## 極限着弾

### 日本公開記念

映画専門誌でもやらないボリュームでの大特集!

Cover Photo  
© 2019 TIMBOON PTY LTD, SCREEN  
QUEENSLAND AND SCREEN AUSTRALIA  
© WORLD PHOTO PRESS 2020  
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

## CONTENTS

004 第19回 **サイゴン物語**  
Saigon Memories  
カントー川沿いの夜市  
(ナイトマーケット)

010 **トンキン湾事件**  
The Gulf of Tonkin Incident

016 **パトリオッツポイント**  
海軍&海事博物館

034 **2020 Shot Show**  
装備アイテム編 ●Report by Muneki Samejima

041 **H&K SFP9**に迫る! Part 2  
●by Muneki Samejima

046 **AK STORM**  
049 **GLOCK17 Gen4**  
052 **東京マルイのGLOCKについて思う**

054 **デルタフォース・カスタム《リアル・スチール・バージョン》**  
060 **キンバー・ウォリアー**  
《ジョン・ウィック・モデル / ガンブラックVer.》

063 **THE グリーンベレー**  
**GREEN BERET**  
3rd SPECIAL FORCE GROUP AIRBORNE  
●文と写真/DJちゅう

P22 作品紹介 文/狩野健一郎  
P24 ベトナム戦時のオーストラリア軍の編成と装備 解説/菊月俊之  
P28 NAM戦と映画ならこの人に聞け!  
「デンジャー・クロース 極限着弾」鑑賞ポイントをデューク廣井が語る!  
P30 映画から学ぶベトナム戦争参戦国 絵と文/狩野健一郎  
P31 ベトナム戦争のオーストラリア軍 解説/鈴木健太郎 イラスト/M.Kelly



070 **Militaria Roundup!**  
WWIIドイツ陸軍/武装SS将校ユニフォーム  
Part 3

076 **ニッポンのちからこぶ 特別編**  
**IF20 Iron Fist 2020**  
●写真と文/菊池雅之  
島嶼防衛強化のための訓練、その名はアイアンフィスト

082 **LIVING with MILITARY vol.3**  
**TASK FORCE 20** 後編

086 **シン・サバゲ三等兵**  
サバゲ三等兵自腹企画再燃!  
呑め撃て買えの三等兵、春のナウオン軍拡

090 **トイガンニュース**  
●WA SVインフィニティ《マイアミ・ティキ》  
●タナカ SIG P220 航空自衛隊EVO2《フレームHW》

### COMBAT FRONT LINE

- 020 サクラ咲く、春のオススメ映画紹介!
- 092 新製品てんこ盛り COMBAT mono
- 094 サバゲ三等兵APS部 天は二物を与えた!? 天才ブルズアイガール、むぎちゃん発掘編
- 097 コラム ベトナムを遠く離れて——。文/小倉徹
- 098 レアミリタリーテクノロジー
- 099 女子視点から探る使えるミリモノ満載! ミリタリーセレクトショップ坂地組
- 100 ゲームOTT『Sniper Ghost Warrior Contracts』
- 109 PRESENT & CIC
- 110 バックナンバー
- 111 奥付&次号予告



特集

# デンジャー・クロス

## 極限着弾

## 日本公開記念

映画専門誌でもやらないorやれないボリュームでの大特集!

久しぶりにベトナム戦争映画がスクリーンに帰ってくる!

オーストラリアで2018年に公開され好評を得た

「デンジャー・クロス 極限着弾」が遂に日本で公開決定!

オーストラリア軍わずか108人が、北ベトナム正規軍と南ベトナム解放民族戦線(ベトコン)

およそ2,000人を相手に戦ったベトナム戦争史に残る激戦「ロングタンの戦い」を

描いた本格戦争映画を本誌では大特集。

作品紹介はもちろんオーストラリア軍の装備やNAM戦研究家による

トリビアまで作品を10倍楽しむために必読の内容でお届けします!

構成/COMBATマガジン編集部

P22 作品紹介 文/狩野健一郎

P24 ベトナム戦時のオーストラリア軍の編成と装備 解説/菊月俊之

P28 NAM戦と映画ならこの人に聞け! 「デンジャー・クロス 極限着弾」鑑賞ポイントをデューク廣井が語る!

P30 映画から学ぶベトナム戦争参戦国 絵と文/狩野健一郎

P31 ベトナム戦争のオーストラリア軍 解説/鈴木健太郎 イラスト/M.Kelly

# 『デンジャー・クロース 極限着弾 日本公開記念』

# ベトナム戦時のオーストラリア軍の編成と装備

一般にアメリカ軍の存在だけがクローズアップされるベトナム戦争だが、その一方で西側陣営も軍事支援軍として部隊を派遣している。ここでは映画『デンジャー・クロース 極限着弾』の公開を受け、ベトナム戦争に参加したオーストラリア陸軍部隊の編制と装備を紹介しよう。

解説/菊月俊之 © 2019 TIMBOON PTY LTD, SCREEN QUEENSLAND AND SCREEN AUSTRALIA

ベトナム戦争は自由主義陣営と共産勢力との戦いで、アメリカ以外にもオーストラリアを始め計5カ国（韓国、タイ、フィリピン、ニュージーランド）が派兵している。アジアの一角に位置するオーストラリアにとって、共産中国と東南アジアにおける共産勢力の台頭は国家安全保障の脅威だったのだ。そして1962年、オーストラリアはアメリカの要請を受け、軍事顧問の派遣を決定する。

## 最初のオーストラリア軍部隊/AATTV

1962年7月31日、30人の在ベトナムオーストラリア陸軍訓練チーム（Australian Army Training Team, Vietnam/AATTV）がベトナムに到着した。メンバーはジャングル戦の高度な経験を積んだ将校と准尉（オ

ーストラリア軍のベトナムにおける戦闘服は“ジャングル・グリーン”と呼ばれるコットンツイルのシャツとトラウザーズで、1959年に採用されたパターンが着用された。シャツはアメリカ陸軍のOG-107ユニティリティ・シャツに似たデザインだが、ショルダー・ループが付くのが特徴。将校はここで見られるようにスリッポン式の階級章（写真は准将: Brigadier）をループに通した。トラウザーズはサイドおよびヒップポケットが両側に付き、左大腿部に大型のマップポケット（英連邦軍の特徴）が付く。写真ではトラウザーズのベルトループにピストル・ベルト（アメリカ軍用）を通してあるが、これはシャツスタイルでの一般的着用スタイル。



ーストラリアSAS隊員とする資料も）で、南ベトナム軍の訓練に従事した。また民間不正規防衛隊(CIDG)を指揮して解放民族戦線(ベトコン)の索敵殲滅(サーチ&デストロイ)作戦にも従事し、'65年11月に戦死したケヴィン・ウィートリー准尉はオーストラリア最高勲章のヴィクトリア・クロスを授与された最初の兵士となっている。

ATTVは翌年には100人規模に拡大され、最終的に200人規模の部隊に発展した。同チームはベトナム戦争におけるオーストラリア軍最多叙勲部隊で最高勲章のヴィクトリアクロス4個、アメリカ軍勲功部隊表彰(Meritorious Unit Citation)、ベトナム武勇表彰(Gallantry Citation)、そして多くの個人表彰を受けている。

## 地上軍の投入と1ATFの編制

1965年、アメリカがベトナムに地上軍を投入すると、オーストラリアも戦闘部隊の派遣を決定。5月25日に王立オーストラリア連隊(Royal Australian Regiment)第1大隊(1RAR)がベトナムに到着し、暫定的にアメリカ第173空挺旅団に配属された。そして5月25日に在ベトナムオーストラリア陸軍部隊司令部(Headquarters, Australian Army Force, Vietnam/HQ, AAFV)をサイゴンに開設。'65年末におけるオーストラリア軍の兵力は約1,500人に達した。



タンソンニユット空港に到着したオーストラリア軍RARの兵士たち。彼らが着用しているのが“ディガー・ハット”で、制式にはスローチハット(Slouch Hat)と呼ばれる。この帽子は1885年頃から着用され始めたもので、カーキ色のフェルト製。写真で見られるように帽子のブリム左側を上折りあげ、金属製部隊章で留める。兵士たちの武器はL1A1ライフルとアメリカ軍のM60多用銃機銃。Photo/Department of Defense

そして翌1966年4月1日には部隊の増大を受け、第1オーストラリア任務部隊(1st Australian Task Force/1ATF)が編制され、サイゴン南東35マイル(約56Km)のニュイ・ダト(Nui Dat)に本部を設置。複雑なジャングル地形の多いフォーク・ツイ(Phuoc Tuy)省を戦闘担当地域とした。またこの年には空軍と海軍もベトナムに派遣され、HQ,AAFVは'66年5月3日に在ベトナム・オーストラリア軍部隊司令部(Headquarters, Australian Force, Vietnam/HQ, AFV)に格上げされる。1ATFはRAR2個大隊、1個SAS大隊、1個野砲連隊と1個ニュージーランド砲兵大隊で構成されたが、オーストラリア軍のベトナム派遣は1年間の“ツ

アー”で、1ATFの隷下部隊は戦争中に何度も変化した。ちなみにベトナム戦争はオーストラリアの「もっとも長い戦争」で、多くの兵士が2回ないし3回の“ツアー”を経験している。

## オーストラリア軍の戦術

オーストラリア陸軍はベトナム戦争では「脇役」だったが、彼らは積極的にパトロールを実施し、フォーク・ツイ省を掌握し続けた。アメリカ軍は歩兵の攻撃に先立ち、空爆を実施したが、共産側は被害を避けて逃走し、攻撃が空振りになる事も多かった。一方オーストラリア軍は小規模のパトロール隊がジャングル内を

オーストラリア軍兵士のトレードマークが“ディガー・ハット”あるいは“スローチハット”と呼ばれる帽子だが、ベトナムの戦場ではコットン製のプッシュハットを着用した。オーストラリア軍のプッシュハットはアメリカ軍のトロピカル・ハットよりブリム(つば)が狭いのが特徴。ベトナムにおける野戦装備はオーストラリア軍のものとアメリカ軍のものが混用されており、右手前の下士官はオーストラリア軍のピストル・ケース(ホルスター)でアメリカ軍のM191A1ピストルを携行している。

散開して素早く進み、敵を発見したならば素早くこれを包囲し、全方向から攻撃する戦術で成功を収めた。

パトロールに活躍したのがジャングル戦専門家のオーストラリアSASで、6個SASパトロール隊が自軍基地から15Km以上離れた地域を絶えず監視し、敵の侵入を防いだ。またSASは敵勢力地域に潜入して基地を攻撃し、大きな損害を与えている。さらにジャングル戦の経験をARVNや地方防衛部隊の訓練に活用して成果



ベトナム戦争当時、オーストラリア軍の野戦装備は英連邦軍のP1958装備だったが、アメリカ陸軍のM1965/67装備との混用が広く行なわれた。映画でもほとんどの兵士がM1956装備をメインに使用しており、これに第2次世界大戦中のP37装備のポーチ等を組み合わせている(画面左側の兵士がP37装備のベシック・ポーチを使用)。またP58装備では容量の大きい“キドニー・ポーチ(腎臓ポーチ)”が好まれ、マガジン収納などさまざまな用途に使用された。

を収めたほか、ARVNレンジャー部隊のアドバイザーとしても活躍した。派兵規模が小さい(派兵5カ国中3番目)ため、一般にベトナムにおけるオーストラリア軍の戦いはほとんど知られていないが、それでも特筆すべき戦闘が存在する。それが映画『デンジャー・クロース 極限着弾』に描かれたロングタン(Long Tan)の戦いだ。この戦いは1966年8月18日に、ニュイ・ダト東約4Kmに位置するロングタンのゴム農園で発生。6RARのD中隊が北ベトナム正規軍第275連隊とベトコンD445大隊と遭遇。その兵力はD中隊が108人、これに対し共産軍の兵力は2,000人以上だった。

戦いの詳細は映画をご覧いただくとして、D中隊は砲兵の火力支援で攻撃を撃退。共産側は245名の戦死者を残して退却した(負傷者は約350人と推定)。オーストラリア軍の損害は戦死18人(1人は負傷による死亡)、負傷24人。数だけ見ると小戦闘と感じるが、この数はオーストラリア軍がベトナム戦争中に1日の戦闘で被

った最大の損害だった。

## ベトナムからの撤兵

その後もオーストラリア軍の派兵は続けられ、1969年のベトナムにおける兵力は戦争中最高の7,672人を数えた。'69年12月には第3SAS大隊がフォーク・ツイ省東部にパラシュート降下を実施(第2次世界大戦以来25年ぶりの実戦降下)。そして'70年2月にはRAR第8大隊がロンハイ・ヒル(Long Hai Hill)における戦い



ベレー帽はオーストラリア軍のヘッドギアの一つでSAS隊員や軍事顧問によって着用された。SASのベレーは1964年にマールン(海老茶色)からベージュに変更されたが、ベトナムでは南ベトナム軍レンジャーと同じ黒を着用した。また黒のベレーは装甲戦闘車輛(戦車と装甲車)のクルーによっても着用されたが、これは第2次世界大戦中の1940年にイギリスが機甲部隊のヘッドギアとして採用し、これがオーストラリア軍でも採用されたもの。

## 隊の引き揚げを開始。任務の重点を「ベトナム化(南ベトナム軍の強化)」に置いた。こうして'70年の兵力は6,763人に減少。部隊のローテーションは継続されたが、到着部隊より帰還部隊の規模が大きく、最後まで残った1個RAR大隊と1個機甲騎兵大隊も'72年3月にベトナムを去り、AFV司令部もその任務を終えた。そしてATT要員の撤退を受けてオーストラリア陸軍援助群(Australian Army Assistance Group, Vietnam/AAAGV)が'72年3月に編制され、南ベトナム軍の訓練と援助を行なったが、'73年1月に活動を終了した。ベトナム戦争に参加したオーストラリア軍将兵は延べ4万7,000人で、415人が戦死、2,348人が負傷している。

## オーストラリア陸軍の装備

### ①ユニフォームと装備

オーストラリア軍のユニフォームといえば“ディガー(Digger)・ハット”が有名だが、これは広いブリム(つば)の左側を折り上げて部隊章で留めたウール製の帽子で、“ディガー”の名はゴールドラッシュの金鉱掘りに由来するといわれる。ただし、戦場ではブリムの短いプッシュハットが広く使用された。スチール・ヘルメットはアメリカ軍のM1が使用されたが、その着用例はかなり少ない。

野戦服は“ジャングル・グリーン(JG)”と呼ばれるコットン製熱帯用ユニフォームで、シャツとトラウザーズで構成。全体のデザインはアメリカ軍のユニティリティ・ユニフォ

ロングタンの戦いでオーストラリア軍と戦ったのは北ベトナム正規軍(NVA)第275連隊とベトコンD445大隊だった。NVAのユニフォームは樹脂製のサン・ヘルメットとグリーン地の長袖シャツとトラウザーズで、黒い“バジャマ”を着用したベトコンとは一目で識別できた。銃器はソ連や中国等からの供与品を使用しており、写真の銃はソ連製のSG43重機関銃(口径7.62mm)。





# 玄人好みの実力派 オーストラリア軍と ベトナム戦争

映画『デンジャー・クローズ 極限着弾』のキーワードである助け合いの精神は、広大な国土と恵まれない気候の中で暮らすオーストラリア人に深く根付いたもので、劇中であれほどの苦境に陥りながらも、仲間を見捨てて逃げ出す兵士が一人もいないのが印象的だ。

統制のとれたオーストラリア軍の強さには昔から定評があり、彼らは“Digger”という愛称があるのだが、この愛称はかつて兵士の多くが鉱夫の出身だったことに因み、第1次世界大戦の塹壕戦ではその名の通り、

穴掘りの実力を遺憾なく発揮した。

第2次世界大戦と朝鮮戦争でも地味ながら献身的な働きをし、さらにサーチ・アンド・DESTROY戦術が初めて実施されたマレー半島の戦い（マラヤ動乱）にも参加して、アメリカよりも早く東南アジアでのゲリラ掃討に従事していたことはあまり知られていない。

●文/鈴木健太郎 ●イラスト/M.kelly

ベトナムには、1962年という早い時期からオーストラリアSAS隊員を中心としたAATTV（Australian Army Training Team, Vietnam）が南ベトナム軍と山岳民族にジャングル戦のノウハウを伝授したほか、SAS自身もアメリカ特殊部隊と同様の非合法作戦を手掛けていた。一般の戦闘部隊は65年から派遣され72年にその活動を終え

るまで、オーストラリア軍全体で6万人以上がベトナムで戦い、3,000人が負傷、521人が命を落とした。

ベトナム戦争を体験した各国の兵士、カメラマン、記者の中にはオーストラリア軍がもっとも規律正しく、自制心を持っていたと証言する者が少なくないが、実力も充分だったようで、アメリカ軍は彼らに対し30個のシルバースター、155個のブロンズスター（戦闘、非戦闘を含む）を授与し、ゲリラ戦の専門学校として知られるMACVリーコンドール・スクールの修了者の中には18人のオーストラリア軍兵士がいる。



第19回  
サイゴン物語 Saigon Memories

カントー川沿いの  
夜市  
ナイトマーケット



太陽が肌に痛いほどだったメコンデルタに、夜がくるとホッと息がつける。薄暮と入れ替わりに、カントー市内のニンキエウ公園周辺ではネオンライトがはしゃぎ出す。公園に立つ黄金のホーチミン像が、足下からライトアップされて宙に浮かぶ。カントーの夜市「チョー・デム・ニンキエウ」が始まる。夜市が開かれているのは、カントー市場前広場とその一帯である。ちゃんと「ニンキエウ・ナイトマーケット」であることを示すアーチも架かっている。アーチ門があるくらいなので、常設の夜市なのだ。ところが昼間、歩いている時にはまったく気が付かない。ホーチミン市では、屋台の食べ物屋でも風呂イスに座らせて食べさせる。一方、こちらカントーの夜市は、食べ歩きスタイルだ。屋台の食べ物が串刺しになっている理由は、ここにある。串に刺さっていれば、移動しながら食べるのに便利だし、なにより容器が不要だ。

文/コンパットマガジン編集部  
Text/CM Editorial Staff  
写真/今井今朝春、WPPコレクション  
Photo/Kesaharu Imai, WPP Collection

カントーのニンキエウ公園に、ホーチミン像が立っている。ホーチミンさんは、細身だったイメージがあるが、こちらはがたいがいい。加えて、ポーズが変わっている。背広の袖に腕を通さず肩にかけ、片手をあげている。さすがに「よっ!」とはいわない。夜になると、足下からライトアップされる。全身が黄金の像だ。

ナイトマーケットは、この公園があるハイバーチュン通りをホアビン通りと交差する方向へ進んでいく手前エリアで開かれている。まさにカントー市場の建物前の広場とその周辺である。カントー市場の建物も、夜になると輪郭線に沿って紅くライトアップされる。ここは、ホーチミン市のベントイン市場とほぼ同時期に

建てられ、歴史ある建物だ。現在はカントー オールドマーケットであるとか、エンシェントマーケットと呼ばれている。観光客相手の土産物屋が多数集まっている。そこもベントイン市場と同じである。カントー市場前をさらに先に進むと、地元の人向けのタンアン市場がある。

夜市には、食べ物と洋服、雑貨を

ぎっしり並べた店が集まっている。ホーチミン市の夜市は、テント掛けがメインだが、こちらでは屋台とワゴンスタイルの店が並ぶ。ころなしか、カントーの方が、おっとりした印象がある。観光客と見たら強引に客引きしてくる者がいない。これがホーチミン市だと、観光客とのつきあいは、ある意味で一期一会。二度

と会わないし、会うつもりもない。その認識があるので、「逃しません」モードで真剣に商売してくる。一方、カントーでは、SサイズのTシャツをその場限りのLサイズに変身させる天晴れなお姉さんたちもいない。明らかに「吹っかけすぎだヨ」の観光客向け値段もいわれない。なかにはいるかもしれないので、注意は必要だ。

川沿いのハイバーチュン通りと、市内を南北に走るホアビン通りを頭に入れておけば、カントー市内を歩き回れる。ナイトマーケットが開かれるのもこの二つの通りがクロスするエリア内だ。周辺には博物館や、コープマーケットにハイランズコーヒーといった利用しやすいチェーン店が集まる。この夜市エリアとさらにデタム通りには、ホテルやドミトリーが集まっている。

# トンキン湾事件

## The Gulf of Tonkin Incident

1964年8月、トンキン湾事件は起こった。

米海軍駆逐艦「マドックス」は北ベトナムの軍事的動向の情報を収集する為に配備されていた。その「マドックス」が3隻の北ベトナムの魚雷艇に襲撃を受けた。アメリカが本格的に軍事介入をする前であり、なぜこのタイミングで事件は起きたのか……。

構成/コンバットマガジン編集部 文とイラスト/M. Kelly

アメリカが、ベトナム戦争に介入するきっかけとなったこの事件。原因を探るにはどうやら時代を少し遡らなくてはならない裏事情があった。

1954年のジュネーブ平和協定後に、北緯17度線でベトナムはふたつに分断された。この時からアメリカのベトナムへの関与が始まった。協定の直後、CIAは空軍大佐エドワード・ランズデールをベトナムに派遣し、特別作戦局の副局長に命じた。彼はベトナムの民間人や少数民族などを募集し、訓練し北ベトナムに対して最初の反乱作戦を開始する。

機密保持のため、訓練はサイパンで行なわれた。最初の作戦は北部海域の漁船に紛れ込むため、ベトナムの木造船（ジャンク）を使った。複数の南ベトナム人と潜水夫から構成され作戦拠点を襲撃。コードネームは「ノーチラス」で高い成功率を収めた。しかし、北側に知られるようになり作戦行動が行き詰まった。また、ジャンクでは遅い速度と弱い火力で北ベトナムのP-4ボートなどには不利だった。

1962年、CIAからアメリカ海軍太平

洋艦隊司令官フレット提督に指揮権が移る。彼は、すぐさま状況を分析しパトロールボート（以下PT）と南ベトナム海軍の潜水兵の更なる育成を提案した。第2次世界大戦でPTの船長だったケネディ大統領はこの提案を絶賛し認めたのだ。

1964年以降、この計画はMACV-SOG（南ベトナム軍事援助司令部特別作戦グループ）の指揮下で展開することとなった。さらに南ベトナム海軍の軍事支援を要請した。合同参謀本部のフレットは計画案をまとめあげ、作戦名「34-63計画」として提出し、これをJCS（アメリカ統合参謀本部）が承認。

この作戦に参加するためにアメリカ海軍シール、海兵隊情報部、ゲリラ戦経験者、そのほかの専門家を集めて構成し、ダナンに本部を創設した。

基本的に作戦「34-63計画」は、国内のクーデターなどの混乱にもかかわらず継続されていた。そし

て、幾度かの作戦の失敗を経験していた。作戦「34-63計画」の新しい計画が準備され、更なる秘密作戦としての「34A計画」として承認された。

作戦「34A計画」とは、北ベトナムに対する心理的な戦争に従事する目的を持ったもので、海軍部は海路での作戦を展開し、沿岸部はアメリカ海軍および南ベトナム海軍で構成される沿岸警備局とした。また、作戦の直接的な実施を支援するため、駆逐艦によるDESOTOパトロール（電子信号の傍受による情報収集活動）も組み込まれ

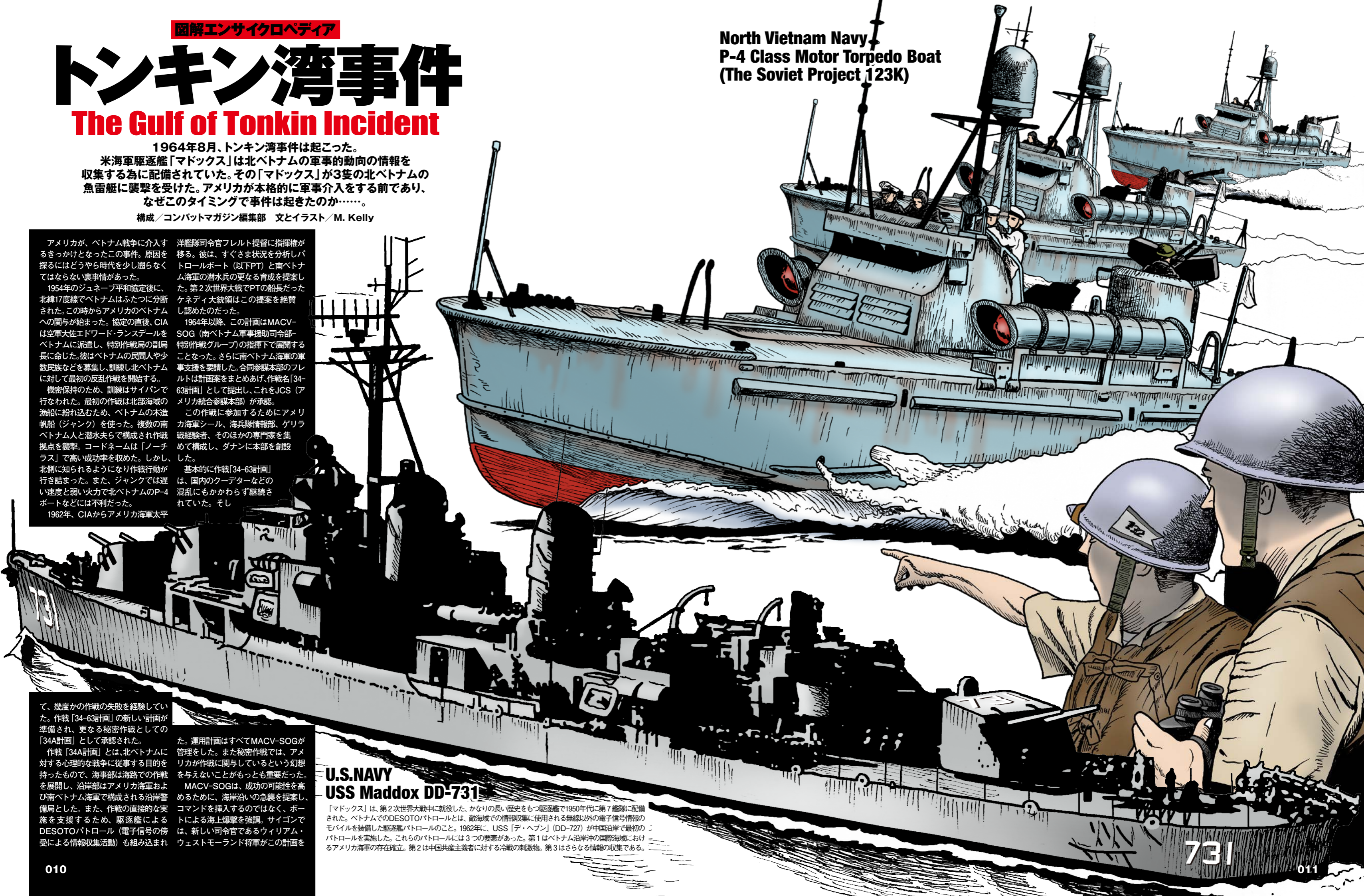
た。運用計画はすべてMACV-SOGが管理をした。また秘密作戦では、アメリカが作戦に関与しているという幻想を与えないことがもともと重要だった。

MACV-SOGは、成功の可能性を高めるために、海岸沿いの急襲を提案し、コマンドを挿入するのではなく、ボートによる海上爆撃を強調。サイゴンでは、新しい司令官であるウィリアム・ウェストモアランド将軍がこの計画を

### U.S. NAVY USS Maddox DD-731

「マドックス」は、第2次世界大戦中に就役した、かなりの長い歴史をもつ駆逐艦で1950年代に第7艦隊に配備された。ベトナムでのDESOTOパトロールとは、敵海域での情報収集に使用される無線以外の電子信号情報のモバイルを装備した駆逐艦パトロールのこと。1962年に、USS「デ・ヘブン」(DD-727)が中国沿岸で最初のパトロールを実施した。これらのパトロールには3つの要素があった。第1はベトナム沿岸沖の国際海域におけるアメリカ海軍の存在確立。第2は中国共産主義者に対する冷戦の刺激物。第3はさらなる情報の収集である。

North Vietnam Navy  
P-4 Class Motor Torpedo Boat  
(The Soviet Project 123K)





陸上自衛隊の新拳銃

# H&K SFP9 に迫る! Part2



前号に引き続きお届けする、陸上自衛隊の新拳銃 SFP9の真価に迫るレポート。今回は実射編。選定テストでその座を競ったライバル、G17との撃ち比べ対決だ。鮫島宗貴がシューターの視点から SFP9を徹底解剖する 付度なしのガチンコレポート!



今回のテストレポートは youtube 「sharkshooter 2011」でもお楽しみいただけます! 実射シーンはぜひ動画と併せてお楽しみください!

# AK STORM

AKS-74Uと同程度のショートバレル先端に着いた短型4プロングハイダーが可愛い。サイドにM-LOK対応のスリットが入った黒い樹脂製ハンドガードの鋭角的なデザインが目を惹く。

**東京マルイ**

©東京マルイ 03-3605-3312  
http://www.tokyo-marui.co.jp/  
Photo & Text by Takeo Ishii

- AK STORM**
- 全長:714.5mm(ストック最短時)、789.5mm(ストック最長時)
  - 重量:2,985g(バッテリー含まず)
  - 動力源:8.4Vニッケル水素1300mAhミニSバッテリー
  - 価格:5万2,800円

## サバイバルゲームに重きを置く「オリジナル・ブラックAKショーティ」

サバイバルゲームでの実用性を前面に押し出したオリジナル・デザインの「ブラック&ショートAK」は、もはや東京マルイの伝統のお家芸! ビカティニーレールマウントを兼ねたリアサイトもユニークだ。

動力源である8.4Vニッケル水素1300mAhミニSバッテリーは次世代AK47シリーズ同様ハンドガード内に収納される。

東京マルイ・オリジナルデザインのAK用マグウェルが格好良い! これがあるのとないのでは操作性に大きな差が出る部分でもあり、別売パーツとしてのリリースを望むAKユーザーが相当数現われそうな予感!

非常に握り易いグリップもオリジナルデザイン。内部に搭載されるモーターはEG1000。また、東京マルイAKシリーズでは初となる「トリガーフィンガーで操作し易いセイフティ&セレクターレバー」を標準装備。そしてマガジンはAK47と同じもの。そう、この銃は「5.45mm」ではなく「7.62mm」なのだ!

HOP-UP調整は従来通りボルトハンドルを引いて行なう。写真ではトップカバーは外しているが、ボルトの隠れた部分の形状や雰囲気にも極力リアルさを求めた造りになっていて感心!

ボトムの前後を入れ替える事でバットプレートの形状を変えられるM4タイプのストックは「MTR-16」からの流用。頑丈そうなストックチューブは基部から新規設計されている。

AK STORMにはご覧のように数多くのオプションパーツが付属する。上から「マイクロプロサイトをダイレクト装着するためのバックアップサイト付きマウント」「長・中・短3サイズのM-LOK用ビカティニーレール」「20mmレール用ハンドストップ」と「M-LOKカバー」はすぐにも欲しい新規パーツで、別売オプションとしての展開にも期待したい。